

マタイによる福音書 6章 26～30、33 節

歌や想像力そして祈りはかけがえのない神からの賜物です。特に幼児期などはこの歌や想像力や祈りによって初めて耐えがたい現在を耐えることができる。何故なら、何もできず、何をやってもうまくいかず、役に立たないと叱られてばかりいる者にとって、歌や想像力や祈りがなければどうして生きていくことができるでしょう。レオ・レオニの「フレデリック」を見ていると、詩や想像力がどれほど生きる助けとなっているかを教えられます。♪「叱られて」♪とか♪「歌を忘れたカナリヤは」♪とかいった寂しい歌や悲しい歌に逃れたり、物語を色々なふう空想することによって自分の境遇を忘れてしまったり、神様に祈ることができるというのは、幼児期に大人が教え育まねばならないとても大切な能力と言えます。幼児が叱られてもいつまでもくよくよしないのも、幼児が朝毎に心新しく生活に対処できるのも、歌や想像力や祈りによって気持ちの切替えができるからです。

ですから、「心に神秘を持っているかぎり、人間は健康であることができる」(G.K.チェスタトン)というのは、真実だと思います。神秘とは現実から離れた時に味わうことができる祈りであり詩的感覚だからです。祈りと詩的感覚があるかぎり、人間は宇宙に美を見出し、その美によって救われるのです。

だからこそ、「♪それは、かみさまのみことばのわざです。せかいのすべてはかみさまによって、つくられた♪」という歌こそ、子どもにまず教えなければならない歌だということです。「子どもには勝利の歌を伝えることこそが必要です」(間崎ルリ子)。神は「近づけられ、教えられる」べきものだ(R.シントラー)、と言われるのは、そのためです。子どもは昔話においてドラゴンを退治する聖ジョージの話を知らなければならないように、子どもには、勝利の歌が伝えられることこそが重要なのです。

その時、子どもたちは、世界は崇高にして荘厳なものであることを知ります。全ては存在自体が奇跡である「有り難し」ということを知るのです。その意味で神の存在こそは、喜びと幼児らしさの最終的擁護なのです。神がおられるということが、幸いのすべてなのです。